

國學院大學學術情報リポジトリ

『玉葉和歌集』の助動詞「らむ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 助動詞「らむ」, 『玉葉和歌集』, 二条派, 「姉小路式」, 藤原為家 キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001703

『玉葉和歌集』の助動詞「らむ」

色川 大輔

キーワード…助動詞「らむ」、『玉葉和歌集』、二条派、

「姉小路式」、藤原為家

一、はじめに

本稿で取り扱う資料である『玉葉和歌集』は、十四番目の勅撰和歌集である。正和元年（一一三二）奏覧、翌正和二年完成、伏見院下命、京極為兼の独撰に係る集である。中世勅撰和歌集における主流となった二条派と異なる、京極派による勅撰和歌集として名高い。この『玉葉和歌集』における助動詞「らむ」の使用状況を調査し、計量的報告を行い、小考をまとめたのが本稿である。

撰集における助動詞「らむ」に対する研究として、本稿

の先行研究となるのは、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（文学社、昭和一八年二月）である。松尾氏は、所謂三大歌集に対する用例分析を行い、総数に対する松尾氏の言う「疑問文」の占有率が『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』の時代を追って増加していくことを示し、こうした趨勢から、「姉小路式」系列の歌学書の記述が出てきたのであるとして、下記のように説いている。

新古今のらむの疑問体は八五%にも達し、遂に中古の語法家をして次の如く説かしめるに至つた。

はね手にはの事らんと疑はんには、

か かは かも なに なぞ など いつ

いづく いかにか いかなる いかでか いく
たび たれ いづれ

これらの詞のいらざしてははねられぬにぞ。(姉
小路手似葉伝)

春樹頭秘抄 同増抄 も同様に説いて居る。(一六九
頁・一七〇頁)

筆者は松尾氏の驥尾に付し、若干の勅撰和歌集、私撰集、
私家集の助動詞「らむ」について調査してきた。その結果
として前掲の松尾氏の論を肯つてきた。その中で、色川大
輔『「菊葉和歌集」における助動詞「らむ」について——『新
続古今和歌集』の「らむ」研究補遺を兼ねて——』(『国語
研究』八三号、令和二年二月)において、撰集における分
布の特徴から、松尾氏の言う「中古の語法家」は、二条派
の系譜に立つ人々なのではないかという私見を示した。

本稿はこれまでに供されてきている勅撰和歌集における
助動詞「らむ」の用例分布と『玉葉和歌集』における用例
分布との比較から、二条派と京極派との特徴となりうる先
行撰集との共通点と、宗とする撰集の相違、そしてその相
違点から、二条派が前掲松尾氏の言う「中古の語法家」と

なりえた可能性について言及する。

勅撰和歌集の本文は、「新編国歌大観」編集委員会編『新
編国歌大観 第一巻 勅撰集編 歌集』(角川書店、昭和
五八年二月)を使用した。

二、『為兼卿和歌抄』に見える語法(句法)意識

『玉葉和歌集』の撰述は先述のとおり京極為兼の独撰に
係るものである。京極為兼は周知のとおり和歌史上の主流
派となる二条派と一線を画した歌風により京極派と称され
るものを起こした人物である。その遺した歌論書である『為
兼卿和歌抄』(佐々木孝浩ほか校注『歌論歌学集成 第
一〇巻』(三弥井書店、平成一一年五月)所載のものを使
用した)に、京極為兼の言語感覚を示唆する一節がある。
従来は二条派の重んじる「姿」の対抗軸として「心」を重
んじる態度を示すものとして重視されている箇所である。

可_レ然人々あつまれる会に、雲客、

あさかやまかげさへみゆる山のぬのあさくは人を
おもふものかは

といへる哥をいひいで、哥の父母といふほどの哥、

いたづら詞はよもあらじとおもふに、「かげみゆる山井」にては心えられ侍を、「さへ」の詞いかにもいひおさめたるにか、おぼつかなきよし申けるに、面々才学の人々、「まことにかく云時はおぼつかなし」にてはてけるも、かのうねめ、この哥をよめる心何ゆへにおこりて、いかによまるべき所よりいできたるぞと、源にもとづき見ずして、山井といへば、それにむきてよめるやうに心えて、不審ひらけぬにや。人の妻にて人にみゆべきみにもあらねど、まうけをろそかなるとてとがむれば、おとこのいふにしたがひて、かのおほきみすかさむとて、出たる身なれば、かはらけとりても、この人をすかさむと思心にて、「みゆべくもなきわが、げをさへ見えたてまつるは、あさくは思はぬぞ」といふによりきたる山井なれば、ことぐさにとりよせたるにてこそ侍を、やがて山井といへばとて、この「さへ」を山の井のぬしになして見ば、まことにおぼつかなし。わが、げになしてみれば、おぼつかなき事なり。かやうの事をだにみわかずして、おもひ見たらむは、かくのみぞあるべき。(五八頁。傍訓等を省略した)

この箇所において『為兼卿和歌抄』が示す「あさかやま」の歌の解釈法は、藤平春男『為兼卿和歌抄——京極為兼(藤平春男『歌論の研究』(ペリかん社、昭和六三年一月)所収)によれば、下記のように解説される。

この為兼の解釈は、この歌の「心」が「何故に起りて、いかにとよまるべき所よりいできたるぞ」と考えて解すべきだ、という立場からなされているのであり、「心」を生じた状況に即しての解釈を求めているものであるが、三句までが序詞となっている原意とは異なっている。二句に比喩表現を認めてそれが四五句に続く文脈を、初句・三句の叙景(的序詞)の文脈に重層させて解するのだが、こういう比喩としてそこに寓されている意味を探ろうとする享受は中世、ことに鎌倉末期以降に多いのであり、「心」の屈折、その複雑さを求める傾向が導き出すのであると同時に、状況描写と結びつけての和歌の説話化への関心とも関係がある。為兼の「心」をひろく開放しようとする主張の側面を示しているが、それもまた中世和歌の一性格を担っているということができよう。(一六〇頁・一六一頁)

その可否はともかく、序詞の範囲の認定に応じて句の係り受けを整理して、両様の解釈法について説明する『為兼卿和歌抄』の態度は、著者とされる京極為兼の持っていたであろう言語感覚を示唆し、その独撰にかかる『玉葉和歌集』が見るべき言語感覚を反映したものである可能性を窺わせるものである。本稿はかように考えたところから出発したものである。

三、松尾捨治郎の数値の修正

久松潜一『中世和歌史論 増補版』（塙書房、昭和三四年九月初版、昭和五三年四月増補版）は、『玉葉和歌集』の主要歌人の収載歌数を整理し、撰述における特徴として、これによると玉葉集では伏見院の御歌が最も多く、定家の歌がそれにつぐのであるが、その他俊成や西行の歌を多くとつている点に新古今時代を相当に重んじていることが知られる。（一九〇頁）

と述べている。『玉葉和歌集』が『新古今和歌集』を重視した撰述態度を取っていることを窺わせるものである。ここでその『新古今和歌集』の助動詞「らむ」に関する

先行研究の示す数値について、述べておきたい。

松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（文学社、昭和一八年二月）は、所謂三大歌集を通して和歌における助動詞「らむ」の用法と変遷とを述べている。

同書は一六八頁において、『新古今和歌集』の用例数を示すに当たり、説明体三六例、疑問体一〇五例、総計二四一例、という数値を示している。

松尾氏の最終の論考であるため、この数字を使用してしまったことがあったが、一見して、総計と内訳が合っていないのは明らかである。

国学院大学図書館蔵の同書（同館請求記号 8157/10。同館資料ID 9001867457）には、疑問体の「105」について見せ消しがされ、「205」と訂せられている。この筆跡が松尾氏といかなる関係を持つか、現在のところ判断する材料を持っていない。

松尾氏は同様の研究を先行して発表しており、それを参照することで、修正が出来る。この訂正はそれと一致しており、訂正者は、このことを知っている人物である可能性が高い。

松尾捨治郎「らむ」の用法を論じて助動詞の機能に及ぶ」
〔国学院大学紀要〕第二巻、昭和一五年一月）がそれであり、こちらには、国学院大学図書館蔵本書入と同様、「205」の記載がある（一五頁）。

また、同書の元になった松尾氏の博士論文、松尾捨治郎「助動詞の研究 自他の対応を中心として」（昭和一七年三月授与博士学位論文。本稿では国立国会図書館蔵本を使用した。同館請求記号J151・文224。同館資料D000010638735）においても、「205」の記載がある（一五九頁）。これらにより、松尾氏の示した『新古今和歌集』中の助動詞「らむ」の分布に係る数値は、説明体三六例、疑問体二〇五例、総計二四一例と見るのが正しいと考えることにする。決定稿であるべき著書の段階での誤植は蓋し松尾氏にとって痛恨のものであったろう。

四、『玉葉和歌集』における助動詞「らむ」の用例分布

本稿で行った調査の結果、『玉葉和歌集』における助動詞「らむ」の用例数は二二九例であった。この用例を、助

動詞「らむ」に構文上関与する、疑問副詞・係助詞及び終助詞の「や」・係助詞及び終助詞の「か」、すなわち「疑問語」と本稿では総称するもの、その有無によって、用例数と全用例における占有率を示すと、以下ようになる。

『玉葉和歌集』総計二二九例

疑問語なし

三一例（約一四％）

疑問語あり

一九八例（約八六％）

他の撰集について、先行研究である松尾氏の『助動詞の研究 自他の対応を中心として』（以下、本節中では、括弧書きで「松尾氏」として示す）の示す数値と、筆者のこれまで行ってきた報告において提示してきた数値（以下、本節中では、括弧書きで「色川」として示す）を、以下に併せて示す。なお、以前には、松尾氏の分類を「疑問語なし」・「疑問語あり」として、筆者の分類と形式上合わせて示してしまっていたが、松尾氏と筆者との分類の原理の若干の相違を踏まえ、ここでは松尾氏の数値については松尾氏の用語を襲用し「説明体」「疑問体」の用語を用いた。

『万葉集』（松尾氏）総計二二七例

説明体

一〇八例（四八％）

疑問体

一一九例（五二％）

『古今和歌集』

（松尾氏総計一二二例・色川総計

一一六例）

（松尾氏）

説明体

三六例（三〇％）

疑問体

八六例（七〇％）

（色川）

疑問語なし

四四例（約三八％）

疑問語あり

七二例（約六二％）

『千載和歌集』

（色川）

総計一七三例

疑問語なし

二三例（約一三％）

疑問語あり

一五〇例（約八七％）

『新古今和歌集』

（松尾氏）

総計二四一例

説明体

三六例（一五％）

疑問体

二〇五例（八五％）

『新勅撰和歌集』

（色川）

総計一五〇例

疑問語なし

二九例（約一九％）

疑問語あり

一一一例（約八一％）

『続後撰和歌集』

（色川）

総計一五六例

疑問語なし

一六例（約一〇％）

疑問語あり

一四〇例（約九〇％）

『新続古今和歌集』（色川）

総計二八四例（※）

疑問語なし

一八例（約六％）

疑問語あり

二二六例（約九四％）

現在のところ対照できる撰集の数値は上掲のとおりである。『万葉集』については零本であるため手続きに紙幅を要するところから、本稿では省略した。

五、宗とする撰集——二条派と京極派と——

本稿で注目したいのは、『万葉集』・『新続古今和歌集』、そしてこれまであまり触れてこなかった『新古今和歌集』と『続後撰和歌集』とにおける分布率である。

『万葉集』における『万葉集』重視と尊重の態度は、例えば久松潜一『中世和歌史論 増補版』（塙書房、昭和三四年九月初版、昭和五三年四月増補版）の

また古代の歌として和泉式部の歌を三十四首えらんでいることは一方に万葉集の歌を多くえらんでいることと合せて注目される。即ち万葉集の歌をば八十一首えらんでいるが万葉集の二十巻から平均にとつている上に、万葉集の秀歌を多くえらんで居り、かつ万葉集

の歌をば原作にほぼ近い形でえらんでいる。勅撰集の中で拾遺集は万葉の歌を多くえらんでいるが、しかし恋の歌を六十三首とりながら四季の歌を春夏秋冬を通じて十三首しかえらばず、殊に秋の歌五首はすべて七夕の歌であるように一面的になっているのに対して玉葉集ではそういう点が少く、万葉集のあるがままの姿を玉葉集の上に出そうとしている。また新古今集も万葉集の歌六十首をえらんでいるが新古今的に改作されている場合が多いに対して玉葉集では改作の歌が少い。(二九〇頁)

言うところからも明らかである。しかし、前掲のとおり、『玉葉和歌集』の示している比率は、『万葉集』のそれとは趣を全く異にする。『千載和歌集』以降の数値と遜色のないものとなっており、『万葉集』の特異性は際立っている。『玉葉和歌集』は少なくとも平安時代最末期以降の勅撰和歌集の伝統的傾向に沿ったものと、この点では見てよい。『万葉集』を尊重したことは確かであろうが、少なくとも語法上の『万葉集』還りのようなことは起こしていない。

先に松尾氏の著書の数値を補正した際に述べたが、『玉

葉和歌集』のもう一つの特徴は、『新古今和歌集』の尊重である。その意味するところについて、石田吉貞「京極為兼」(久松潜一・実方清編『日本歌人講座 第四卷 中世の歌人Ⅱ』(弘文堂、昭和四三年一二月)所収)が、京極為兼の個性を、

為兼の歌はその人物の特色がはっきりしているように、かなり特色がはっきりしているが、その中でも最も顕著な特色は新古今的だということであろう。

(二三八頁)

これは考えてみると少しく妙なことである。万葉の歌を尚び古風の歌を庶幾する為兼が、それとは明らかに反極に立ち、新しさの特に目だっている新古今風の歌を作っているのは解し難いことだからである。これは一体どうしたことであろうか。その理由はそうとうに複雑であるが、第一には為兼が定家を慕っていたことが挙げられると思う。為兼は前にもしばしば述べたごとく、若い時には為家から歌を学んでいるが、かれが自分の歌風を樹立する頃には、明らかに為家よりは定家を慕っているようである。(三三八頁・三三九頁)

定家を慕うということは、取りも直さず定家の歌を慕うことであり、定家の歌を慕うということは、取りも直さず新古今の歌を慕うことでなければならぬ。どうして為兼は、幼少の頃から愛された為家の歌を離れて定家の歌に近づいたのであるかという点、為家の歌が二条家の歌に直結するものであることから、二条派に対して異を立てるために、故意にそれから離れたということが考えられようが、より強い理由は、為兼という人間が定家に近い人間であったがために、いつしか定家的なものに引かれたということにあったのではないかと思われる。(二三九頁)

と述べているところが注目される。

二条派の撰集である『新統古今和歌集』の極端なまでの「疑問語あり」の占有率の高さは、これまでに指摘してきている。

前節に示した諸撰集の数値を見てみると、それまでの撰集から上方に逸れる形で際立っている藤原為家撰『続後撰和歌集』の疑問語使用率約九〇%という数値がある。先の石田氏の述べる「為家の歌が二条家の歌に直結するもので

ある」というところが思い合わされる。

また、「定家の歌を慕う」ということは、取りも直さず新古今の歌を慕うことでなければならぬ」ということも、『玉葉和歌集』の数値から考え合わせられる。『玉葉和歌集』の疑問語使用率約八六%に対し『新古今和歌集』の「疑問体」は八五%と近似している。

藤原定家『新古今和歌集』から京極為兼『玉葉和歌集』へという京極派の線と、藤原為家『続後撰和歌集』から飛鳥井雅世『新統古今和歌集』へという二条派の線という対立軸を示唆する相違が、助動詞「らむ」の疑問語併用率という言語の面においても窺えるものであり、微差かもしれないが、無視するには興味深いものがある。

このことは、「姉小路式」系列の歌字書に見える助動詞「らむ」に関する記述が、二条派宗匠の学説によるものである可能性を裏付けるものでもあると考える。その学説は藤原為家の歌風に端を発し、二条派宗匠によって形成され引き継がれたものである可能性も示唆するものである。

六、おわりに

本稿では、勅撰和歌集十四番目の撰集である『玉葉和歌集』における助動詞「らむ」の使用状況について報告した。

京極派の創始者である京極為兼が鋭敏な言語感覚を持っていたであろうことはその遺した撰集や歌論書からも窺い知られる。しかしながら、その慕い親しんだであろう歌風から考えるに、「姉小路式」等の歌論書とは距離があると考えられる。『玉葉和歌集』の調査結果はそのことを裏付けるものと考ええる。

二条派の語法の性質を『続後撰和歌集』の数値は示唆することになる可能性を見出すことが出来た。今後、これまでに提示することの出来ない二条派宗匠による勅撰和歌集の用例を整理する必要があると感じている。

【参考文献一覧】

- 一、井口牧二「為兼歌論と仏教思想」(『国文学研究』七十二集、昭和五五年一〇月)
- 二、池原陽斉「平安時代中期における『萬葉集』伝来の一様

相——西本願寺本『赤人集』の形態を徴証として——」(『上代文学』第一一四号、平成二七年四月)

- 三、石田吉貞「京極為兼」(久松潜一・実方清編『日本歌人講座 第四卷 中世の歌人Ⅱ』(弘文堂、昭和四三年二月)所収)

- 四、伊藤敬「菊葉和歌集考」(『国語国文研究』四四号、昭和四四年九月)

- 五、伊藤敬「菊葉和歌集考補遺」(『藤女子大学国文学雑誌』第一一〇号、昭和四七年三月)

- 六、伊藤敬「新北朝の人と文学」(三弥井書店、昭和五四年一月)

- 七、伊藤敬『室町時代和歌史論』(新典社、平成一七年一月)

- 八、井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期 改訂新版」(明治書院、昭和六二年五月改訂新版。昭和四〇年一月初版)

- 九、井上宗雄校注・訳『新編日本古典文学全集四九 中世和歌集』(小学館、平成二二年一月)

- 一〇、井上宗雄校注・訳『新編日本古典文学全集 四九 中世和歌集』(小学館、平成二二年一月)

- 一一、井上宗雄「人物叢書 新装版 京極為兼」(吉川弘文館、平成一八年五月)

- 一二、井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』（笠間書院、平成一九年七月）
- 一三、今谷明『ミネルヴァ日本評伝選 京極為兼——忘れぬべき雲の上かは——』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年九月）
- 一四、色川大輔『新統古今和歌集』の「ラム」（国学院大学大学院紀要 文学研究科 第三九号、平成二〇年三月）
- 一五、色川大輔『家の三代集』における助動詞「ラム」の用法について（国学院大学大学院紀要 文学研究科 第四〇号、平成二一年三月）
- 一六、色川大輔「さればが含蓄されて居ると見れば——助動詞「らむ」の語法をめぐる批判史覚書——」（『国語研究』第八〇号、平成二九年三月）
- 一七、色川大輔「武家歌人今川氏真の詠作における助動詞「らむ」について——疑問語との結びつきをめぐる——」（『国学院雑誌』第一一八巻第六号、平成二九年六月）
- 一八、色川大輔「此のらむは静心なくを受くるなり——或る「新説」の解釈史上における位置について——」（『国学院雑誌』第一一八巻第一二号、平成二九年二月）
- 一九、色川大輔『菊葉和歌集』における助動詞「らむ」について——『新統古今和歌集』の「らむ」研究補遺を兼ねて——」（『国語研究』八三号、令和二年二月）
- 二〇、岩佐美代子『京極派歌人の研究』（笠間書院、昭和五九年一〇月）
- 二一、岩佐美代子「京極為兼の歌論と実践」（『和歌文学論集』編集委員会編『和歌文学論集七 歌論の展開』（笠間書房、平成七年三月））
- 二二、岩佐美代子「玉葉和歌集全注釈 別巻」（笠間書院、平成八年一二月）
- 二三、岩佐美代子「冷泉家時雨亭文庫藏『歌苑連署事書』翻刻と訳注」（『鶴見大学紀要 第一部 国語・国文学編』第三六号、平成一一年三月）
- 二四、岩佐美代子『京極派和歌の研究（改訂増補新装版）』（笠間書院、平成一九年一二月改訂増補新装版）
- 二五、歌川卓夫「萬葉集卷十と赤人集・古今和歌六帖との間」（『古代ノート』第一号、一九六六年一月）
- 二六、大野峻『新釈漢文大系六七 国語 下』（明治書院、昭和五三年一〇月）
- 二七、小沢正夫「鎌倉時代の万葉論——京極為兼を中心として——」（『愛知教育大学論叢 一般教育研究』第二四巻

第二号、昭和五一年一月二月

- 二八、小沢正夫・松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集
一一 古今和歌集』（小学館、平成六年一月）
- 二九、景井詳雅「『人麿集』の『萬葉集』享受——類本上巻の
場合——」（『和歌文学研究』第九五号、平成一九年二月）
- 三〇、片桐洋一『古今和歌集全評釈（上）』（講談社、平成
一〇年二月）
- 三一、河北騰『今鏡全注釈』（笠間書院、平成二五年一〇月）
- 三二、久曾神昇編『伊達本古今和歌集 藤原定家筆』（笠間書
院、昭和四六年四月）
- 三三、財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 第
二巻 古今和歌集 嘉禄二年本 古今和歌集 貞応二年
本』（朝日新聞社、平成六年一二月）
- 三四、齋藤清衛『近古文芸思潮史 応永・永享篇』（明治書院、
昭和一一年一月）
- 三五、佐々木孝浩ほか校注『歌論歌学集成 第一〇巻』（三弥
井書店、平成一一年五月）
- 三六、佐佐木信綱編『日本歌学大系 第四巻』（風間書房、昭
和三七一年一〇月）
- 三七、渋谷虎雄『玉葉和歌集中の万葉歌について（上）』（大

阪学芸大学紀要 A.人文科学」第三号、昭和三〇年三月）

- 三八、渋谷虎雄『玉葉和歌集中の万葉歌について（下）』（大
阪学芸大学紀要 A.人文科学」第五号、昭和三三年三月）
- 三九、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第一巻
勅撰集編 歌集』（角川書店、昭和五八年二月）
- 四〇、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第六巻
私撰集編Ⅱ 歌集』（角川書店、昭和六三年四月）
- 四一、新沢典子「赤人集と次点における萬葉集卷十異伝の本
文化」（『上代文学』第一一四号、平成二七年四月）
- 四二、時枝誠記・増淵恒吉『古典の解釈文法』（至文堂、昭和
二八年五月）
- 四三、時枝誠記『日本文法 文語篇』（岩波書店、昭和二九年
四月）
- 四四、土岐善磨『日本詩人選一五 京極為兼』（筑摩書房、昭
和四八年二月）
- 四五、中川博夫『和歌文学大系四〇 玉葉和歌集（上）』（明
治書院、平成二八年一月）
- 四六、中川博夫『和歌文学大系四〇 玉葉和歌集（下）』（明
治書院、令和二年六月）
- 四七、西下経一『古今集の伝本の研究』（明治書院、昭和二九

年十一月。パルトス社、平成五年八月復刻版による)

四八、日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第二卷』(岩波書店、昭和五九年一月)

四九、橋本進吉「万葉集は支那人が書いたか」(『国語と国文学』第一四卷第一号、昭和二十二年一月)

五〇、久松潜一『中世和歌史論 増補版』(塙書房、昭和三四年九月初版、昭和五三年四月増補版)

五一、久松潜一・西尾実校注『日本古典文学大系六五 歌論集 能楽論集』(岩波書店、昭和三六年九月)

五二、久松潜一監修・井上豊編『賀茂真淵全集 第五卷』(続群書類従完成会、昭和六〇年九月)

五三、深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』(笠間書院、平成一七年三月)

五四、藤田陽子「京極為兼の歌論——止観と相応——」(『日本本文芸研究』三三卷一号、昭和五六年三月)

五五、藤平春男『歌論の研究』(ぺりかん社、昭和六三年一月)

五六、松尾捨治郎『国語法論攷』(文学社、昭和二十一年九月)

白帝社、昭和三六年一月追補版)

五七、松尾捨治郎「らむの用法を論じて助動詞の機能に及ぶ」

(『国学院大学紀要』第二卷、昭和二十一年十一月)

五八、松尾捨治郎「助動詞の研究 自他の対応を中心として」

(昭和二十一年三月授与博士学位論文。本稿では国立国会図書館蔵本を使用した。同館請求記号UT51・文22-4。同館資料ID000010638735)

五九、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』(文学社、昭和二十八年二月)

六〇、村尾誠一「中世和歌における京極派的なるもの——二条派和歌との接点からの試論——」(『東京外国語大学論集』七五号、平成一九年十二月)

六一、森本郁子「玉葉和歌集に採られた万葉歌人の歌」(『連第三集、昭和五九年三月』)

六二、八島正治「初期為兼の世界」(『和歌文学研究』三〇号、昭和四八年十二月)

六三、安田徳子「為兼歌論の性格——空海の詩論との関わりを中心——」(『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』)

(『右文書院、昭和六一年一月』)

六四、和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、平成二六年十二月)

六五、和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、平成二六年十二月)

六六、和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、平成二六年十二月)

六六、和歌文学大辞典編集委員会編『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、平成二六年十二月)